

霧の町

カリムは小高い岩山の上に立っていた。そこからは遙か二〇〇〇メートル下の山間の村を見下ろすことが出来た。

周りには誰もいない。遠く一、二羽の鷺が大きく弧を描きながら飛んでいるのが見えるだけだ。ここなら彼がアザーン（礼拝の呼びかけ）の練習をしても誰の迷惑にもならない。カリムは無限空間のような谷間に向かって出来る限りの大声を出した。

「アツラアア、フ・アフバル（アラーは偉大なり）。」「アツラアア、フ・アフバル」

その声は、山々にこだまして広大な空間に吸い込まれていた。

「アツラアア、フ・アフバル」、
「アツラアア、フ・アフ

バル」

「アシユハド・アン・ラ・イラハ・イラッラアーアアアアア
アアー(アラーの他に神は無しと私は証言する。)」

「アシユハド・アン・ラ・イラハ・イラッラアーアアアアア
アアー」

カリムは、そう唱えながら、今は遠くリヤドに住んでいる
兄スルタンのことを思っていた。

スルタン、貴方は素晴らしい人だ。町の誰もがあなたのこと
を尊敬している。誰よりも早くコーランを暗唱し、誰よりも
素晴らしい声で人々の心を惹き付けた。

ずっと神童として崇められ、素晴らしいシェイク(族長)に
なるだろうと期待されて育った。そして、貴方はその期待に
十分過ぎるほどに応え、リヤドのサウド王大学の医学部も信
じられないような素晴らしい成績で卒業した。アメリカの大
学への留学を薦められたのも自然なことだった。

どうして貴方はそんなに優秀なのだ。イスラムから近代科
学まで……

そして、あの素晴らしいアザーン・・・

「アシュハド・アン・ラ・イラハ・イラッラアアアアアアアアアア
アアア」

「アシュハド・アンナ・ムハンマド(マホメット)・ラスルウ
ウーラアアア(ムハンマドはアラーの使徒であると私は証
言する)。」

「アシュハド・アンナ・ムハンマド・ラスルウウーラアアア
ー」

いつしか、霧が発生して山並みを這い上がってきた。必死
にアザーンを繰り返して唱えるカリムの周りも次第に霧が取
り囲んできた。

と急にカリムの声が弱まり、そして途絶えた。

カリムの目には一筋の涙が流れた。

「駄目だ。駄目だ。兄さんのアザーンにはとても適わない」

「それだけじゃない。一生懸命に努力してここアブハのハリド王大学を主席で卒業して、あの最も難しいと言われているアラムコ(サウジ国営石油会社)への就職も内定したのに・・・皆は祝福してくれたけど、何故か僕は素直に喜べない・・・割り切れない・・・」

「それはスルタン、兄さん、貴方のせいなのです」

今は、霧が周りを多い尽くし、一寸先も見えなくなっていた。白いトープに身を包んだカリムの姿だけが白い霧の中に浮かんでいる。

谷間からは凄いい勢いで霧が吹き上げてくる。

カリムは天に向かって両手を伸ばした後、胸の前でそれを合わせた。そして手のひらを上に向けて神に祈りを捧げたが、すぐにその手で顔を覆ってしまった。

カリムはすすり泣いていた。

その涙が手のひらに溢れてきた。

カリムは涙に濡れた手で身にまとった白いトーブを鷲づかみにした。体は小刻みに震えていた。若いカリムの頭の中には兄に対するコンプレックスの他にも様々な悩みが渦巻いていた。

「一体僕は誰なんだ。征服者、リヤドの人間のようにこんな白いトーブなんかまとって……一族の養蜂家などは今でもこのアシールの伝統的な衣装を気楽にまとっているというのに……」

そして、霧に閉ざされた谷間に向かって大声で続けた。

「この地域には貧しい人が多い。我が部族にも多い。それなのに僕の将来には何の不安もない。族長一家として将来が約束されている。それで良いのだろうか。僕には割り切れない」

「兄さん、僕はそんな矛盾に耐えられそうもありません」

霧はカリムに容赦なく吹き突けていた。

「兄さん、あのアルミナの気持ちに僕には良く分かります。彼がどうして世界貿易センタービルに飛行機ごと突入したのか・・・兄さんは彼を放蕩生活から救いイスラムの道へと立ち直らせました。しかし、結局、それが彼を神の元に行かせることになってしまったのではないのでしょうか。皮肉なものですね・・・兄さんは、それは違うと言つてでしょうか・・・」

「でも、僕にはどうしてもそうとしか考えられません」

次第に霧が薄くなってきて、うつすらと周りの景色が浮かび上がり始めた。同じ鷺だろうか、一、二羽の鷺が空中を舞っているのもうつすらと見えてきた。

大声を出したことでカリムの心は少し落ち着いていた。

やがて、青空が戻り周囲には再び伊豆の山々のような光景が現れた。カリムは、ゆっくりと岩山を下り始めた。

カリムは、アルバハの豪族・ザハーティのシェイクの家柄に生まれ、なに不自由なく育ってきた。地元では神童シェイク・ザハーティ兄弟と言われるほど、兄弟は皆優秀で、コーランの暗唱、学業成績ともに他を抜きん出していた。

兄スルタンは、リヤドのサウド王大学医学部、カリムはアブハのサウド王大学医学部と超難関の入試も軽々と突破した。ただ、二人とも医者になるわけではなかった。スルタンはアメリカのテキサス大学に留学してバイオを研究し、カリムも大学を去りアラムコに入社することになった。

スルタンの場合は、いずれシェイクを継がなければならぬという医者にならないわけがあったが、カリムには特に理由があったわけではない。サウジで最難関という試験に挑戦してみたかったのと、折角医学部に入りながら医者にならない兄へのあてつけだったのかもしれない。

アブハはサウジアラビアの南西部アシール地方の主都で標高二二〇〇メートル、夏でも涼しいリゾート都市だった。今は冬だから、寒いくらいだったが、アルバハも似たような

ものだったから、カリムにしてみれば生まれ故郷で生活しているようなものだった。むしろ、アルバハの方が標高がより高く、雪がより多く降り、また、よく積もった。

学生達から人気の高いシャーリア(イスラム法)学部のハミード教授は、カイロからやってきた生粋のエジプト人だったので、いつも冬になるとぶるぶると体を震わせ寒そうにしていた。

「アブハは本当に寒い。ここがサウジとはとても思えない。カリム、熱い紅茶でも入れてくれ」

「分かりました。先生。もうここに来てから、大分経つと思うのですが、なかなか寒さに慣れませんね」

「生まれ育って培われた本性はなかなか変わらないものだ。逆に、年を経るに従い、寒さに弱くなってきたような気がする。いつも早く春になってくれと祈っている」

カリムは、学部が異なってはいたが、シャーリア(イスラム法)学部に出向いて、この著名なウラマーでもあるハミード教授の講義を熱心に聴いていた。ザハーティ族は、イスラ

ム原理主義の流れを組んでいたから、その血が騒いだのかも知れない。その点、ワツハーブの流れを組むサウド家とも考へはより近いと言えた。ただ、クライシュ族の流れも組んでおり、その意味ではサウド家よりもよりムハンマドに近く自分達はより正統な位置にいるとの自覚もあった。

ハミードはそれを良く理解して、カリムを特別可愛がっていた。カリムもハミードを尊敬していた。

ハミードはカリムの淹れてくれた紅茶を一口啜った。

「あっちっち。カリム、本当に熱いな」

「済みません。ちょっと熱過ぎましたか。先生が余りに寒がりなものですから、つい……」

「これだから、良いところ坊ちゃんには適わない」

ハミードは笑いながらそう言った。

「ところで、カリム、お前は、あの同時多発テロ事件の犯人アルミナのことを調べたがっているそうだな」

「ええ、彼は私の故郷、アルバハの出身ですし、私の兄・スルトンが彼を厚生させたと聞いていますので、尚更です。実は、先生にもお聞きしたいことがあったのです」

ハミードは、熱い紅茶に息を吹き掛け、ちよつと啜ると、そのカップを受け皿の上に置いて、暫らく静かに物思いに耽っていた。そして、思い切ったように語り始めた。

「カリム、お前はわしの考えを十二分に理解してくれていると思っている……言っても良いだろう……」

「アルミナはわしの真名弟子でな。真摯にイスラムを信奉するモスレムだった」

「彼は偉業を成し遂げて天国に行った。異教徒に一矢報いて立派に審判の日を迎えることが出来た。羨ましい限りだ。学生達はそんな彼を未だに英雄として崇めている」

まだ、夕暮れには少し時間があつたが、外は深々と冷えてきた。ハミードは感慨深げに紅茶をぐいと飲んだ。

「わしがとやかく言うより、アルミナのことを良く知るため

にはお前の故郷でもあるアルバハの彼の家を訪ねてみてはどうかね。彼の家族を紹介してやるさう」

ハミードはぼそっとつぶやいた。

「・・・アルミナ・イブラヒム・アル・ガービッド・・・良い男だった。父親のイブラヒムは貧しい養蜂家だったが、アルミナが英雄として崇められるようになるのを知らずに、放蕩息子だったアルミナの将来を心配しながらガンに倒れた」
一段と寒々としてきた窓の外を眺めながら、ハミードは続けた。

「今は、年老いた母と彼の妻が幼い子供の面倒を見ながら、細々と暮らしている」

カリムは、ハミードがどうしてアルバハの、アルミナの家族のことをそこまで詳しく知っているのだろうかと訝しく思ったが、それをハミードに聞くことは控えた。

「先生、有難うございます。私は、ガービッド族のことを良

く知っています。アルバハの有力部族の一つです。それでは、早速、明日にでも行ってみます」

ハミードは、カリムをアルミナの家族と引き合わせるのが自分の定めだと思っていた。

「カリム、以前からわしはお前がマハディ(救世主)になれるのではないかと思っていた。アルバハに行つて、アルミナのことを詳しく聞けば、きっとその道を歩き始めるのではないかと思っている」

カリムは、思いも寄らないハミードの発言に戸惑っていた。

そこにドアが開いて一人の若い男が中に入ってきた。

「イマーム(導師)。もうすぐお祈りの時間です。ご準備をお願い致します」

「うむ。分かった」

ハミードは威厳を持ってそう応えるとおもむろに立ち上がった。

カリムは、ガーミッド族の村を歩いていた。村人は皆アルミナの家を知っていた。教えられた通りに山間の道を上がって行くと棘(いばら)のある木々に囲まれた民家が見えた。

小さな泥作りの家、というよりも小屋のように見えた。ハミードの言っていた通り貧しい養蜂家の造りだ。養蜂家らしく、家に続く道路脇には、円筒形の巣箱が幾つか置かれ、その上には古い布が被せてあった。

カリムは木で出来た玄関の扉を叩いた。中から、何か言いながら人が近づいて来る音が聞こえた。そして、扉が開いた。

老婆の顔が見えた。

老婆はカリムを見ると、驚いたように目を見開き、いきなりカリムを抱きしめた。

「アルミナ、アルミナ、やっと帰ってきたんだね。ずっと待っていたよ」

カリムはその一言で全てを察して、黙って抱かれるままにしていた。老婆の涙がカリムの頬を濡らした。カリムは、まるで自分がアルミナになったような錯覚を覚えた。

奥から一人の女性が歩み寄ってきた。女性は、見るからに安物の刺繍の付いた黒いミズナドという服を纏い、その上に小さな皮を縫い合わせて作ったミツザルを羽織っていた。

しかし、暗がりから浮き上がったその姿は、そんなみすぼらしい衣服を纏っているのに、まるで天使のように神々しかった。カリムを見据える円らかな瞳はキラキラと輝いていた。

カリムは老婆の肩越しにその女性を見つめると、全てを了解したことを頷(うなず)くことで示した。女性もすまなさそうにカリムに頷いた。

「あなた、お帰りなさい」

声を弾ませながら女性は言った。

「ただいま・・・長い間、待たせたな。済まなかった」

カリムはアルミナになりきっていた。

老婆は、カリムから身を離しながら言った。

「アルミナ、お父さんもお前をずっと待っていたんだが、さつき町まで出かけてしまった・・・お前を見たら、きつと、

大喜びすることだろうよ」

「少し痩(や)せたようだが、大丈夫かい。知っての通り家には美味しい蜂蜜が沢山あるから、いつものようにパンと一緒に食べれば直ぐに元に戻るよ」

老婆は、笑顔でカリムの肩を軽く叩いた。

「有難う。大丈夫さ。元気だから何も心配することはないよ。母さん、メディナで評判のデザートも持ってきているから後で皆で食べよう。これで、羊のミルクでもあれば、完璧さ」

カリムは、そう言って土産に持ってきた最上級のデザート(なつめやし)を老婆に手渡した。老婆は大喜びだった。

「済まないね。こんな上等なものを・・・暫く口にしたことがなかった。楽しみだね。ファリファ。アルミナにコーヒーを入れてあげて」

その美しい女性の名前はファリファというらしい。

「私はトウモロコシを挽(ひ)いているところだった。もう少して終わるから、コーヒーでも飲みながら、二人で話をしておいておくれ。今日はゆっくり出来るんだろう。アルミナ」

カリムは、あまり長居は出来ないとはとても言えなかった。

「ああ。夜遅く出掛けられれば良いさ」

「そうかい、相変わらず忙しいんだね。とうもろこしを挽き終わったら美味しい夕飯を作ってあげるから食べておいで」

老婆はそう言うと奥の台所に行った。

「シエイク・カリム様。有難うございました。母は気が触れておりました・・・どうか、お許し願います。母は、夫アルミナ、それに父イスマイルも未だに生きていると思っているのでございます。無理ありません。父が深い谷底に飛び込んで自殺し、夫もあのような最後を遂げましたので・・・シヨックも大きかったのですが、二人の死んだ姿を目にしているのですから・・・それに認知症気味と村の医者は言っております」

ファリファは頭を下げカリムに懸命に詫びた。

「良いんですよ。大学では医学を学びましたので、多少心得ています。お母さんの言っていることを否定したり、刺激になるようなことは決して言いませんから安心して下さい」

「有難うございます……ご挨拶が後になってしまいました。
申し訳ございません。今日はこのようなむさ苦しいところ
にお越し頂き、大変光栄です」

「いや、こちらこそ、急に参りまして申し訳ありませんで
した。是非一度お邪魔してアルミナさんのお話を聞きたいと思
っていたものですから……」

カリムは、清楚で美しいファリファの顔に見とれ、言葉が
詰まった。

「カリム様。私の顔に何かついていますか？」

「いや、その……女手ばかりで大変だなと思っていたもの
ですから……」

「もう慣れました。ところで、母ではありませんが、私も夫
が戻って来たのではないかと錯覚を起こしたくらいです。実
は、大変失礼なのですが、貴方様は夫に生き写しなのです」

カリムも写真を見て自分はアルミナに似ていると思って
いた。兄スルタンはアブドルアジズ大王の血が現れ、まるで
ネジドのエリートのように見えたが、カリムはアシル伝統
の血が色濃く出たようだった。二人は全く異なっていた。

「そうですね。それは嬉しい。私もアルミナさんを英雄だと思っ
ていますから・・・」

カリムは正直に言った。

「有難うございます・・・貴方様のような偉い方からそのよ
うに言われると夫も本望だと思えます」

ファリファの目には涙が溢れていた。

「このガーマッドでは、陰では英雄と褒めてくれる人もいる
のですが、決して表立ってそのようには言いません。むしろ、
皆、静かに私達から離れて行きました。シェイクに至っては、
リヤドの手前もあるのでしよう、テロリスト呼びわりです。
ザハーティの方は違うのでしょうか？」

「私も人前ではアルミナさんを英雄と言ったことはありま
せん。貴方にだけそう言ったのです」

「夫はシェイク・スルタン様にも大変お世話になりました。
あのお方も決して夫をテロリスト呼びわりすることなどあ
りませんでした」

カリムは、このガーマッドでのアルミナの家族の生活はき
つと辛いものだったに違いないと哀れに思っていた。

「それが、私が嫁いで参りました時には、既に父は亡くなっております。ただ、その時には、まだ母も気丈でした」

ファリファは一息ついて外を見た。

木々の間をうつつすらと霧が流れて行くのが見えた。

「なんでも、父はアルミナの将来に悲観して、あの切り立った崖の上から谷底目掛けて身を投げたそうです」

指差すその方向には、アルバハでは有名な自殺の名所が見えた。そこから身を投げれば決して遺体が見つかることはない。村人は谷底に潜む魔物が跡形も無く食べてしまうと思っていた。切り立った崖を降りて遺体を捜しに行こうとしたものもいたが、ほとんど垂直の険しい谷をやっとの思いで少し降りてみたものの、遥か下で霧が湧き上がって来る中大鷲が群がって旋回している様子などを見て引き返したという。

「アルミナは父の死を知り一晩中泣き明かしたそうです」

「兄スルタンからはアルミナさんの話は聞いていたのですが、お父さんのことは詳しく聞いていませんでした」

カリムは、アルミナの話もそれほど詳しくは聞いていなか

った。スルタンがあまり話したがらなかったからだ。カリムが噂にスルタンがああ同時多発テロのテロリスト・アルミナを厚生させたということを知り、しつこく聞いたのでようやく話してくれただけだった。

ファリファは、母から聞いたというアルミナの放蕩生活と父イスマイルの死についてカリムに詳しく話してくれた。

アルミナは、ロックバンドでギターを弾きながら歌を歌っていたらしい。しかし、サウジアラビアでは集会が禁止されているのでコンサートなどが表立って行なわれることはなかったし怒れる若者達の行き場はなかった。

アラブ伝統の音楽が私的な会合で演奏されることはあっても、ギターなどが使われることは決していない。ましてエレキなどは問題外だった。アルミナなどは社会から弾き飛ばされた異端児だった。密かにコンサートを行なってムタワ(宗教警察)に補導されることも度々あったという。

父親、親族、族長などが州政府に呼び出され、嚴重に注意

されることさえあつたらしい。

それでも、アルミナは懲りなかった。

アルミナは天才だった。音に敏感でコーランの暗誦も図抜けていたし、その美しい声は聞く人を魅了した。地域の暗誦コンテストでも常に優勝を争っていた。一度聞いた音楽も全てそのまま憶えてしまう。不幸せだったのはロックに巡り合ってしまったことだろう。

町のレコード店でたまたま買ったレッドツェッペリン(ゼップ)のアルバムを聞いてアルミナは衝撃を受けた。

ゼップのギターリスト、ジミーペイジのセミアコ(エレキ・セミアコースティック・ギター)の音色はアルミナの耳に焼き付き離れなかった。一丁のセミアコを手に入れ、ペイジを真似て弾くまでにはそれほど時間は掛からなかった。また、その美声はゼップのボーカリスト、ロバート・プラントを凌ぎ、音量は凄まじく、音域、歌唱力もロバート並みに神がかりだった。

このボーカルとギターに秀でた天才を擁したバンドが若

者達の間で人気を博さないわけはなかった。もし、アルミナが欧米にいたら、直ぐにメジャーデビューを果たしていたに違いない。

しかし、厳格なイスラムの国、サウジでは、周囲の共同体から弾き飛ばされたアルミナの生活が荒むのは自然なことだった。一時は、ハツシツシ(大麻樹脂)にまで手を出す墮落振りだった。そのアルミナが名門サウド王大学に入学することが出来たのは生まれついて頭が良かったせいだった。

父イスマイルは息子の勉学費用、下宿代などをなんとか工面したが、それが貧しい養蜂家としては限度だった。

イスマイルが金銭面では一切心配を掛けまいとしたせいもあるが、若いアルミナは何不自由なく育ち、周囲に比べて裕福な家庭と思い込んでいた。

アルミナは、好きなロックに一層のめり込んで行った。アブハの町はアルバハより大きく怒れる若者達の数も多かったしファンの数が増えたからだ。アルミナにはロックが全てになった。それでも、陰に隠れて行なうコンサートの費用捻

出は難しかった。切符代は取るが、参加人数には限界があるし赤字続きだった。アルミナは、その費用も父にせがんだ。取崩し始めれば、その速度は速い。イスマイルの貯金はアルミナのお陰でどんどん食いつぶされて行った。

それでも、イスマイルはアルミナが大学を卒業して条件の良いところに就職してくれることをよすがに我慢した。しかし、やがて、その夢が碎かれる時がやってくる。

アルミナの放蕩生活が嵩じて、四年間で卒業することが出来なくなったのだ。アルミナはロックで生きたかったが、サウジでロックで生活することなど夢のまた夢だった。留年は続きアルミナの将来は閉ざされた。

既に、イスマイルの貯金は底を突いていた。

そんな時、たまたまアルミナはカリムの兄スルタンをアブハで見かける。スルタンはサウド王大学で開催されたバイオ関係の学会に出席するためにアブハを訪れていた。

「シェイク・スルタン・・・シェイク・スルタンではありませんか」

アルミナは懐かしげにスルタンに話しかけた。スルタンは振り向いて、その声の主を確かめると微笑みかけた。

「アツサラーム・アレイコム」

「・・・アレイコム・サラーム」

「君はアルミナじゃないか。ガームिटドの・・・」

「憶えていてくれましたか。大変光栄です」

アルミナは、格段に身分が上のスルタンが自分のような他部族の身分の低いものかを憶えてくれたのがこの上なく嬉しかった。

「コーランの暗誦コンテストでいつも優勝を争った君を忘れるわけではないじゃないか」

そう言うと、スルタンは、アルミナとアラブ式のハッギング(抱擁)をした。かつての自分の栄光を思い出させてくれたのが嬉しくてスルタンを抱きしめるアルミナの腕には思わぬ力が入った。

「夫はシェイク・スルタン様との出会いは神のお導きとずつと申しておりました」

「そうですね。アルミナさんらしいおっしゃり方ですね。兄もアブハでの偶然の出会いを喜んでいました。私が兄から聞いたのは、その出会いの後からのことです」

カリムはファリファの話を聞いている内にアルミナについての記憶の断片が急速に纏まって来て一つの明確なイメージを形作ってくるのを感じていた。

「シェイク・スルタン、ロックをお聴きになられたことはありませんか？」

アルミナは思い切ってスルタンに聞いた。

「勿論、ありますよ。テキサス大学に留学していた時には、アメリカ文化にも大分親しみましたからね」

「そうですね・・・本場で・・・自由な世界で・・・羨ましい限りです」

アルミナの目には涙が潤んでいた。自分は行けなかったという悔しさというよりも、目の前に自由な世界を体験してき

た人がいるということ感激していた。

「それで、その時にロックをどうお感じになりましたか？」

アルミナは恐る恐る聞いた。

「私には馴染めませんでした。異なる世界の音楽だというのが私の率直な感じです」

アルミナはがっかりした。いつもコーランの暗誦コンテストで優勝していたスルタンには豊かな音楽的感性があることは分かっていた。その声の美しさも自分が適わなかったくらいだ。その良さを知る前に避けていただけだろうと思った。「レッドツエッペリンはご存知ですか？」

アルミナは、スルタンが知る筈は無いと思いながら聞いてみた。

「レッドツエッペリンはアメリカではなく、イギリスのロックグループですね。あのグループは、飛びぬけてギターが上手いし歌も素晴らしい。しかし、あのハードさにはついていきません」

「……………」

アルミナは声が詰まった。スルタンは良く知っていた。自

分はレッドツエツペリンが大好きで彼等の曲を演奏して、いずれ彼等のようになるのが夢だなどとはとても言えなかった。

しかし、その内にそれはスルタンの知るところとなった。スルタンはアルミナの置かれた境遇も十分に理解して心配してくれた。

「アルミナ、今度、ソーダの岩山の上に行って、私とアザーンを唱えてみないか」

スルタンは、いつもの優しい笑顔でアルミナに語りかけた。スルタンは決してアルミナを非難することは無かった。ただ、アルミナにイスラムの道に戻るようそれとなくしむけただけだった。荒んでいたアルミナの心が徐々に穏やかになっていった。アルミナは快く応じた。

「はい、宜しく願います。暫く真剣に唱えたことはありませんが、決して貴方に後れをとることはありませんよ」

「それは頼もしい。楽しみだ」

遙か二〇〇〇メートル下の山間の村を見下ろすことの出
来る岩山の上に二人の姿があった。

「アッラアア、フ・アフバル（アラーは偉大なり）。」「ア
ッラアア、フ・アフバル」

「アッラアア、フ・アフバル」「アッラアア、フ・アフ
バル」

高く、鋭く、そして、勢い良く伸びた、艶（つや）やかな声
が山々にこだまして広大な空間に吸い込まれて行った。

何度も何度も唱え続けた後、二人は笑顔で顔を見合わせた。
「素晴らしい。さすがに喉を鍛えているだけはある。君はア
ルバハの今のいかなるムアッジン（アザーンを行う者）より
優れている」

「有難うございます。当然ながら何度挑戦してもシエイクの
足元にも及びませんでした。それにも係わらず、過分なお褒
めの言葉を賜り光栄です」

「そうだ、今度、私がアルバハのイマームに言って君をムアッジンとして迎えるよう話しておこう」

アルミナは、スルタンの心遣いに涙が出た。夢を捨てるわけには行かないが、アブハの生活は行き詰まっている。スルトンの勧めに従いアルバハに戻る決心をした。

そんな矢先に父イスマイルの自殺が伝えられたのだった。

カリムは重い気持ちでコーヒーを一口啜った。

窓の外の霧は、ますます濃くなっていた。今は、イスマイルが身を投げたという断崖は霧に隠れて見えない。

「ところで、私はお父さんが断崖から身を投げたというのは知りませんでした。ハミード教授からはお父さんがガンに倒れたと聞いていたものですから・・・」

「ガンになったことは間違いありません。母からそのように聞いております。父は子供の頃から病気一つしたことも無かったのですが、アルミナのことを気に病んでから急におかしくなったそうです。家でふさぎ込んでいることが多くなっ

て日々心身ともに衰弱して行きましたので、見かねた母が病院に行くように勧めたそうです。それで膀胱ガンが見つかったのですが、進行が早くて見つかった時には手遅れだったとのことでした」

「それは残念なことをしました。元気な人のガンはとりわけ進行が早いものです。すると、お父さんは、ガンを苦にして自殺されたのかもしれないですね」

「そうかもしれません。ただ、夫は父の窮状を知り、自分が殺したようなものだと言って悔やんでいたそうです。母はカリム様のように言って宥(なだ)めたようですが、そう言い張ってきかずに泣き続けたそうです」

もう少し早く兄にあっていれば、あるいはイスマイルは死なずに済んだかもしれないとカリムは考えていた。

そして、やがて息子が求道者、聖者、そして英雄として認められるのを経験できたかもしれない。

いつの間にか霧も上がり、今は、満天の星が見え、月の光が周囲を青白く照らし出していた。そして、点々と置かれた街頭の黄色い光が輪のように周囲を浮き上がらせている。

カリムは何度も何度もアルミナの家を振り返った。アルミナの母とファリファは寒い中いつまでも玄関のドアの前に立ってカリムを見送っていた。カリムは重い気持ちでそのドアが視野から消える曲がり角を曲がった。

気配(けはい)を察して、また、その角まで戻ってみると案の定、そこにはまだ二人の姿があった。カリムは一度深く頭を下げたあと、最後の別れを告げるように大きく手を振った。二人もまた手を振っていた。カリムの目からは止めどなく涙が流れていた。

アルミナもジハード(聖戦)に立ち上がった時、二度とこの家に戻ることはない、こんな気持ちでこの曲がり角を曲がったに違いない。カリムは、今度は、思い切って曲がると、いたたまれずに走り出した。

そして、暫く走ってから立ち止まると、

「アルミナのお母さん、さっきの食事は凄く美味しかったですよ……有難う……。決してその味を忘れることはないでしょう」

カリムはそう呟いた。まだ、すっかりアルミナのままだった。

アルバハに戻ったアルミナは、まるで別人のようにイスラム世界に没入し、やがて、聖人と崇められるようになった。

その理由の一つは、スルタンが予期した通りアルミナがアルバハの歴史に残るような名ムアッジンになったからだ。それは、勿論、アルミナの精進の賜物でもあったが、何よりも天性の美声、感性によるところが大きかった。

彼がアザーンを唱えると街中が酔いしれた。

モスクの中での人気も絶大だった。常に自分を捨て、他者を救うことに尽力したからだ。アルミナの母は、そんな彼の変貌、評判が嬉しかった。時折そんな彼の姿をイスマイルに見せたかったと涙を流した。そして、やがて、嫁、ファリフ

アも迎え人も羨む幸せな家族を築く。

彼の変貌はアルバハの貧民街を最初に訪れた時から始まった。そこで彼が見たものは想像を絶するものだった。

狭い泥作りの家に大勢の人が一緒に住んでいる。子供達は伴に支え合い、上のものが下のものの面倒を見ていた。食事は一つのパンを千切って皆で分け合って食べ、決して空腹を満たすことはない。空腹で泣き出す子もいるが分け与えるものもない。眠る時にもゆっくり眠るためのスペースもない。雑魚ね状態だった。

それでも、家のあるものは恵まれている。テント生活のもの、半壊した家に住んでいるものもいた。

彼等の多くは、周囲の村から、分け与えてもらうべき土地もなく弾き飛ばされたもの達だった。生活を支える大人の男どもは定職がなく殆どその日暮らしだった。職にあぶれれば家族のその日の糧はない。

一九八六年の原油価格暴落でサウジの石油収入が激減し

た時、その影響を最初に受けたのが彼等だった。主都リヤドと地方都市アルバハの格差、そして、その地方都市の中での格差は更に大きい。

アルミナは貧民街で奉仕活動が続ける内に自分がいかに幸せだったかを嫌というほど思い知らされた。

それでも、健康なものはまだ良い。病を患ったものは悲惨だった。飢えて死んで行く他はない。骨と皮だけになった病人は静かに天に召されるのを待っている。どうすることも出来ないアルミナはそんな病人を時に悔し涙でただ抱きしめた。彼の腕の中で安らかに死んで行った病人もいた。

アルミナは、貧民街に行つてパンを分け与えた。モスクからの喜捨もあったが、それでは足りなくて、貧しい養蜂家だったが、その細々とした財産を削つて奉仕した。自分はぼろぼろの服を着ていても人助けを先にした。妻、ファリファもそんな彼を懸命に支えた。

そんなアルミナを見かねてスルタンがアルミナに喜捨をしようとしたが、アルミナはそれを固辞し、その分を貧しい人に喜捨するよう願った。

スルタンはアルミナの献身的な願いを聞いて、何不自由なく暮らしている自分を恥ずかしく思ったものだ。いつしか、スルタンは自分を越えてゆくアルミナの姿を見ていた。

「シエイク・スルタン、私はこの世界の矛盾にもう耐えられません。アルバハだけでは問題は解決しません。ジハードに立ち上がり神に召されたいと思っています」

スルタンとアルミナの母は、懸命にアルミナを引き止めたが、アルミナの決心は揺るがなかった。

妻ファリファは夫を信じて引き止めようとはしなかった。

アブハのハリド王大学に戻ったカリムはハミード教授に会いアルミナの家族から聞いたことを報告した。

ハミードは何度も大きく頷きながらそれを聞いていた。

「アルミナのことを良くお分かり頂けたようですね。それで、今はどうお感じになっていらっしゃるのでしょうか」

「教授、アルミナは私の考えていた通りの人物でした。私には彼の気持ちが良く分かります」

ハミードは、そこで思い切って言った。

「シェイク、いや、メヘディ・カリム様。貴方のような気持ちの方には是非私ども“沙漠のサソリ”の統領になって欲しいと思います」

カリムは、その言葉を予期していたように即座に応えた。

「それがクライシュ族を祖先に持つ私の天命なのでしょう」
「有難うございます。カリム様は、これからリヤド、ダーラ
ンに向かわれます。近々、対十字軍を含めた様々なジハード
をリヤド、ダーラン、ヤンブー、ジューベイルなどで計画し
ておりますので、是非宜しくお願い申し上げます」

ハミードは立ち上がったカリムの姿から神々しい光が放たれるのを感じていた。